

小学校1年国語科（書写）

めざせ！ひらがなめいじん！

授業者 澤田 仁志

実践のポイント

新学習指導要領では、内容の初めに、「知識・技能」が位置付けられました。そのことによって、知識・技能を活用し、自ら考え、判断し、表現する力をはぐくむことを重視していることが明確になりました。書写も文字という重要な伝達ツールを習得する重要な学習であることは、いうに及びません。

入門期の本単元では、文字学習の始めとしてひらがなの書き方を学習します。ひらがな一文字一文字の「とめ」「はね」「はらい」「まがり」「おりかえし」「むすび」などの書き方や書き順を理解し、語句や文の中で正しく書けるようになることをねらいとしています。また、拗音・促音といった小さく書く文字と、句読点、かぎなどの書く位置と大きさを理解して、正しく書くこともねらっています。さらに、ひらがなの表の学習において、終筆や送筆の書き方、書き始めるところ、書き順などの各項目を振り返り、書く力の定着を図る単元を構想することが必要だと考えました。

書写は知識・技能を習得することに重きを置いた領域ですが、知識・技能もアクティブ・ラーニングを通して身に付けることが効果的であると考えます。友達とどのように書くことで正しい文字が書けるのか考えを出し合ったり、友達の文字のよさを見つけ、それを取り入れたり、文字の特徴をグループで考えを出し合いながら見つけたりするなど、より子供が主体となり、対話をしながら学ぶ学習形態を意識した授業を構想することが、これから求められていく書写の授業の一つの方向なのではないかと考え、本実践を構想しました。

授業のねらいと展開



添削のし合い（図1）

いうまでもなく書写のねらいは、「文字を正しく書くこと」にあります。そのために、子供が、「姿勢や筆記具の持ち方」「点画の書き方や文字の形などの特徴」「無理なく文字を書くための筆順」などの大切さに気づき、そこに着目しながら主体的に学習することができるような仕組みが必要となります。その仕組みとして「学びのゴールとなる学習活動」を「めざせ！ひらがなめいじん！」とし、子供が「めいじん」になるために、毎時間進んで正しい文字を追究していく学習過程を構築しようと考えました。

授業は、毎時間同じ流れで進みます。後段で詳しく述べますが、大まかには、「違和感のある文字の提示」→「課題の把握」「ただしく書くためのこつ的交流」→「ペアでの添削のし合い」（図1）→「自分で書いた文字の添削と仕上げ」→「学習の振り返り」という流れを繰り返します。繰り返すことで、学習に見通しを持ち、何を学ぶかの課題を把握することができ、主体的に文字を身に付けていくことができると考えました。

実践のここに注目！

視点1：資質・能力の育成を支える学びの文脈

書写における一年生のひらがなの学習は、「覚えたひらがなを話すこと・聞くこと、書くこと、読むことの学習に生かす」「他教科での学習に覚えたひらがなを活用して、思考したり、表現したりする。」「伝達ツールとして、ひらがなを積極的に使っている。」など、書写で身に付けた資質・能力を日常の様々な場面に活用できるようになることを目的としています。つまり、子供たちにも「書写の学習をがんばって、字が上手になると、どういうときに役立つだろう？」と投げかけ、学びの必要感をもたせることで、より子供は目的を明確にして、主体的に学んでいくことになります。

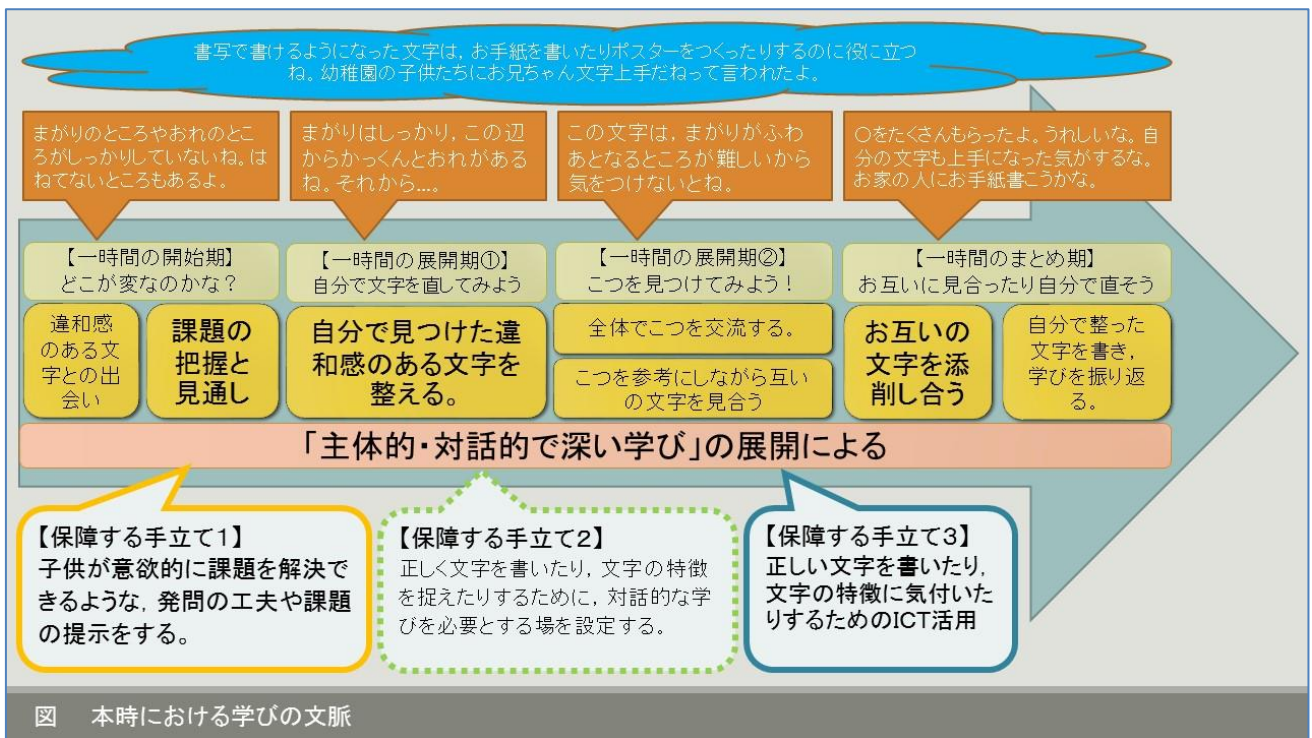
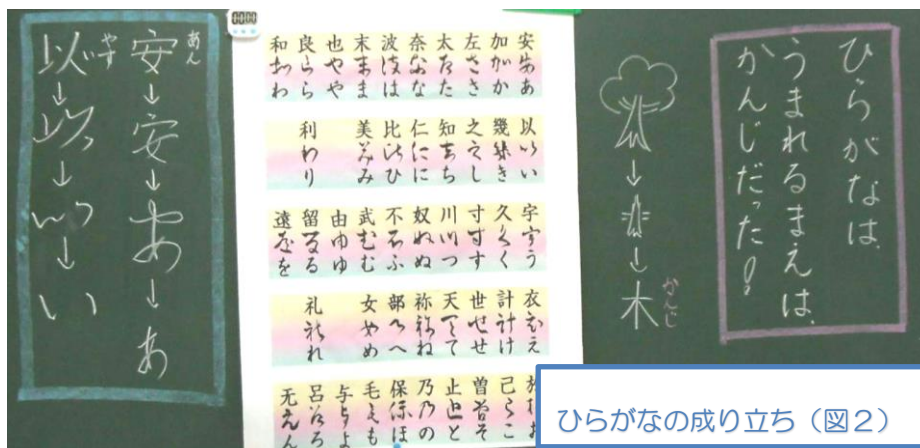
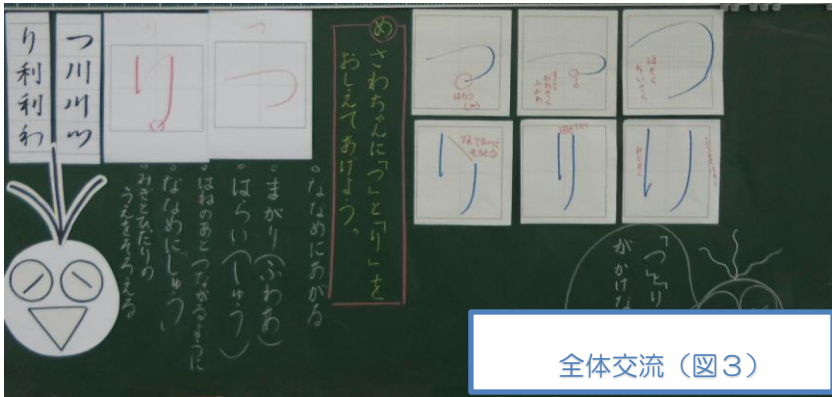


図 本時における学びの文脈

そこで、ここでは、今回の「ひらがなの学習」をどのように展開してきたのかを、学びの文脈に沿って紹介します。



国語の学習や書写の初歩の学習で、ひらがなを学んできた子供たちに、ひらがなの成り立ちを提示しました。(図2) ひらがなを書くときのイメージをさらに明確にするためです。子供たちは興味津々で、自分の名前の文字を確認したりしていました。



本時の目標で、学ばせたかったり、気付かせたかったりする部分を、子供が違和感をもつようにあえて、字形の整わない文字を提示して、それを直す、自分で添削するという流れにしました。

ア、ワークシートの文字を自分で添削

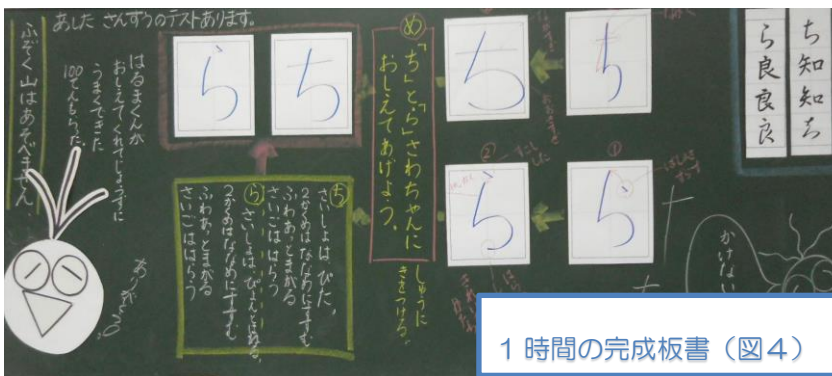
イ、そのひらがなを書くコツを全体交流 (図3)

ウ、見出したコツを使って、自分で書く

エ、文字を書く際にペアの友達の書いている様子を見る

オ、互いの姿勢や鉛筆の持ち方を指摘し合ったり、文字を添削し合ったりする

カ、自分で文字を書く



この流れの中でも、なかなか難しいのが添削し合うことです。互いに添削し合うというのは、その子の主観や文字を書く技能の差などによってかなりの個人差があり、友達の添削に満足できない子供も現れます。

しかし、こうした学習を繰り返すことで、一年生の子供たちは、違和感のあるところに指導事項に沿って気付くようになってきました。

添削は、主観が混じっていたり、字形の整った文字を書けない子供もいます。しかし、この授業展開を考えてからは、添削をするという言語活動や、文字の特徴を説明するという文脈に沿った言語活動が、書写の学習に非常に有効に働いていることが、わかってきました。

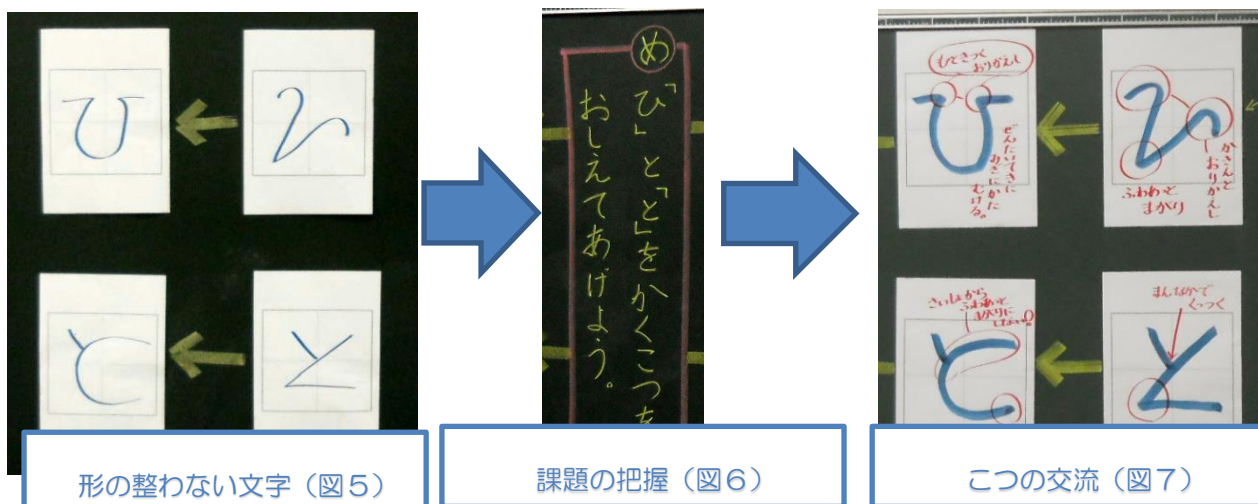
視点2：主体的・対話的で深い学びを保障する手立て

【手立て1】子供が意欲的に課題を解決できるような、発問の工夫や課題の提示をする

子供が課題を解決していく必要感や必然性を感じながら、課題を追究していくことができるようにするためには、発問を工夫したり、課題提示を工夫したりすることが不可欠です。そこで、単元を通して「ひらがなめいじんになろう！」という課題を提示しました。このことで「名人のポイント探し」という、課題をつかむ段階が毎時間繰り返されるため、自分で学習することを見つけることができ、より学びに主体的になると考えました。

書写の学習でイメージがある「お手本通りに書きなさい」という指導ではなく、「どうすれば正しく書くことができるのか」と自分で考えて文字を書くことができるような課題提示が子供の意欲をさらに高めることになると考えます。さらに、あえて形の整わない文字を書いてどこが悪いのか、また何に気をつけて書くとよいのか気付くことができるような発問の工夫も有効です。子供にとって難解な文字が、どうすると正しく書くことができるのか、運筆の仕方や文字の形、マス目の効果的な活用方法など、様々な観点で考えることができるような発問の工夫も有効です。課題提示や発問の工夫をすることで、友達の考えを聞いたり、一

一緒に話し合いながら考えてみたりするなど、対話的な学びも誘発することができると思います。

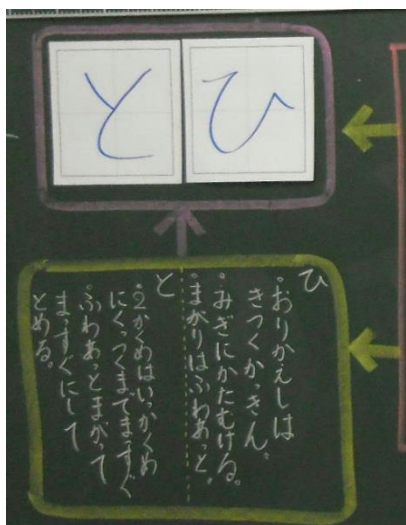


形の整わない文字 (図5)

課題の把握 (図6)

ここの交流 (図7)

発問や問題の提示の一例を紹介します。上の写真は、形の整わない文字 (図5) を提示しているのですが、その文字の気をつけさせたいところをあえて、子供が違和感を抱けるように、変形させて提示しています。そうすることで、子供は本時で学ぶべきところや課題を把握します。(図6) 子供はお手本やこれまでの文字経験をもとに、子供は、直すべきポイントを、全体交流しながら直していきます。(図7) その直しているところが、そのまま指導事項に直結するため、教師が「こう書きなさい」と教えなくても子供自らが、文字を書くコツやポイントを見つけて自分の書く文字に生かすことができるのです。



文字を書くポイント (図8)

左は、全体で交流しながら、子供たちが見つけた、文字を書くコツやポイントです。(図8) 子供たちは、一年生らしい自分の言葉でまがりやおろかえしを「カッキン」「ふわあ」と表現しながら文字を習得していきます。(図9 図16) この言葉をいいながら、身体全体で表したり空書きしたりしながらさらなる定着も図ることができます。



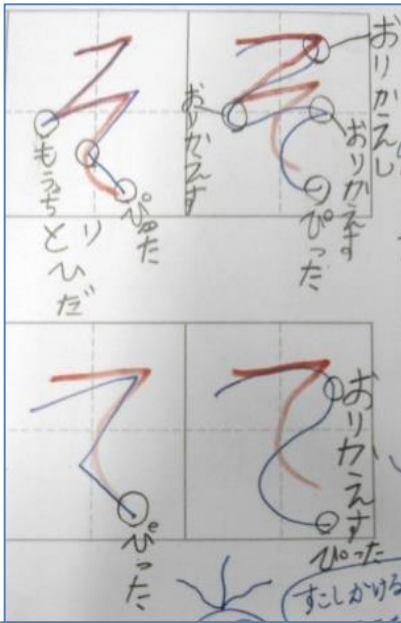
身体全体で表す (図9)

【手立て2】正しく文字を書いたり、文字の特徴を捉えたりするために、対話的な学びを必要とする場を設定する。



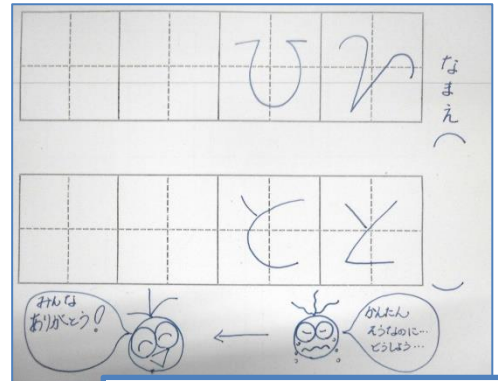
教え合い (図10)

友達と正しい文字の書き方について考えを出し合ったり、友達の文字のよさを見つけ、それを取り入れたり、文字の特徴をグループで考えを出し合いながら見つけたりするなど、より子供が主体となり、対話をしながら学ぶ学習形態を工夫しました。(図10) さらに、子供同士が、教え合ったり、互いの書き方を交流したりするなど、自然と対話が生まれるような場面設定も行いました。そうすることで、子供自ら、文字の特徴をつかみ、より正しい文字を書くにはどうしたらよいか、考えを出し合いながら学ぶ姿が見られました。



違和感のある文字の添削 (図11)

図11は、子供が違和感のある文字を自分で添削しているワークシートの一例です。まず自分で添削してみ、そのとなりの空欄のマス目に改めて書いてみます。(図12) 改めて書いた文字は、自分で添削したり教師が添削したりするのではなく、となりの友達と交換して、添削をします。友達の文字を添削することは、自分の文字も添削されているということになりますから、子供たちは、大変丁寧に添削します。



ワークシート (図12)

この丁寧に添削するという行程が、その子の文字の定着をより確実なものにするのです。添削して返すときには、何か一つでいいのでアドバイスを返します。自分の文字が批評されるので、子供たちも真剣に耳を傾けます。聞き合う関係(図13)ができあがります。

時には、お互いに「直したポイントが同じ」という出来事も起こります。「人の振り見て我が振り直せ」のような、一年生らしい可愛らしい場面がそこかしこで出会えるのは、対話的な学びを取り入れた良さとも言えるでしょう。



聞き合う関係 (図13)

【手立て3】正しい文字を書いたり，文字の特徴に気付いたりするために ICT を活用する。

書写は，正しい文字を書く学習ですから，視覚で正しい文字や，姿勢，持ち方などを見せることは，大変効果的です。しかし，教師が実際に黒板にチョークで文字を書いて字形などを提示することは効果的ですが，鉛筆やペンで書いている姿や，持ち方などは，教師が見せるのには限界があります。そこで，ひらがなを実際に鉛筆を使って教師が書いている様子を実物投影機で見せたり，ひらがなの書き方の動画を視聴し，形や文字の特徴について話し合ったりする ICT を活用することが有効です。また，実物投影機の上で実際に書いてみながら，友達とよいところや改善点について話し合うことができるような活動も有効でした。図14の写真は，映像を見ながら，空書きする子供たちの様子です。

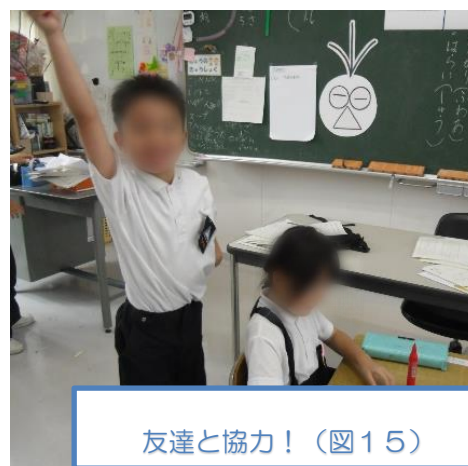


映像を見ながら空書き（図14）

授業者からのコメント

低学年の書写こそ，主体的で対話的な学びを！

書写の授業は，言うまでもなく，技能を身に付ける学習です。ですから，なんとなく，「静かな教室で一人一人が文字を書くことに取り組み，練習をして，清書をして，提出する。」とか，「一人の先生が35人の子供たちに対して，一斉に授業を進めている」という印象がありました。（常に楽しく書写の授業を進めている皆様は申し訳ありません。）しかし，書写に限らず，どの教科においても，知識や技能を身に付けることこそ，主体的・対話的な学習が必要なのではないかと考えます。技能を身に付けるために，自分で考えたり，友達と協力し合いながら探究したり，解決に向けて考えを出し合うことが大切なのです。（図15）



友達と協力！（図15）

そのようにして身に付けた文字を書く力を，他の教科で文字を書くときや，様々な生活場面で，紙や筆記具を選んで，適切に文字を書くことができるように活用していくことが最終の目的となります。

書写・書道（習字）について考える



身体全体で！（図16）

学校教育では，小中学校が「国語科『書写』」，高等学校が「芸術科『書道』」となっており，考え方どころか，教科自体が異なります。学習指導要領には，「各教科等の学習活動や日常生活に生かすことのできる書写の能力を育成することが重要となる。（中略）さらに，文字や文字の集まりの書き方を基礎として，筆記具を選択し効果的に使用するなど，目的や状況に応じて書き方を判断して書くこと」とあります。また，毛筆を扱うことについても，「毛筆による学習を通して点画や点画の書き方への理解を一層深めて書けるようにする。」「毛筆を使用する書写の指導は硬筆による書写の能力の基礎を養うよう指導すること。」とあり，あくまで，日常生活で硬筆による文字を書く力を身

に付けることが重視されています。

一方、書道は、「元気の良さを感じる」「力強さを表す」「伸びやかさを感じる」など、多様な美の学習となります。つまり書写の学習では、これらの観点で評価をすることはありません。しかし、毛筆で学習しているときは、「書道」とか「習字」という言葉が使われます。習字は、いわゆる書道教室のイメージで考えると、右のようになります。

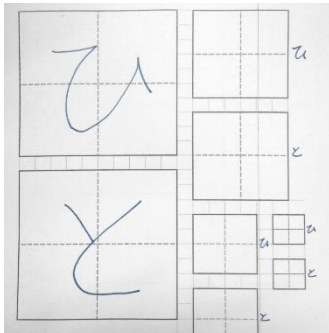
こうした指導方法から脱却した学習が書写です。書写は、基本的に自分の文字をより正しくするために、教科書のポイントと比べながら、自分の文字はポイントをクリアしているか、どのように修正していくとよ

いのかを考えて、解決していく課題解決の授業です。ですから、当然、評価も学習過程を大切にします。作品作りは目的ではなく、あくまでも様々な場面で整った文字を活用することが目的となります。

- ①手習いによる反復練習で技術を高める。心も大切にする。
- ②手本をそっくりまねる。
- ③毛筆の作品をつくるのが目的
- ④評価する場面は書き上がった清書
- ⑤静かに心を落ち着かせて集中する

書写で学習したことは、思い切り生活の中に生かされるはず…

「覚えたひらがなを話すこと・聞くこと、書くこと、読むことの学習に生かしている。」「他教科での学習に覚えたひらがなを活用して、思考したり、表現したりしている。」「伝達ツールとして、ひらがなを積極的に使っている。」（※将来的には、筆順も正しく楷書で文字が書け、漢字の習得量も豊富な人。身に付けた書写能力を様々な活用できる人。→例：領収証に素早く正確に、聞き取った名前や企業名を書くことができる人、人札、会議などの板書、様々なポスターなどのデザインなど、文字を工夫して書いたり、様々な場面で活用したりできる人）



これは、私たちが、書写で育てたい資質・能力です。ノートやワークシートなど、どの教科においてもある程度まとまった文字量を書きます。書写の学習で培った力はここでも発揮され、安定して正しい文字を書くことに生かされます。

図17のように、書写のワークシートは、様々な大きさと書くことができるようにすると、より多くの場面で活用できます。多くの子供たちは、「もっと文字を正しく、誰もが読みやすい文字を書きたい!」と思っています。そんな

活用できるようなワークシート (図17)

思いに応える書写の授業を作っていきたいと思えます。